

## ■ 序 文

---

癌の診断において画像診断の役割が重要であることは、いうまでもない。病変が癌であると生検などによって診断が確定すると、次に大切なことは病変の広がり診断である。国際的には、国際対がん連合(Union Internationalis Contra Cancrum, 英語名はUnion for International Cancer Control; UICC)がTNM分類を決めており、わが国では、これらに準じて各学会が『癌取り扱い規約』を発行している。この癌の広がり診断には、画像診断が重要な役割を果たす。

一方、『画像診断』誌で悪性腫瘍の病期診断についてまとまって取り上げたものは、2013年に大友 邦先生が編集された臨時増刊号『悪性腫瘍の病期診断－治療法と予後の分岐点を見極める』が最後で、既に9年が経過している。この間の2017年に『UICC 第8版』が刊行され、これに伴ってわが国の『癌取り扱い規約』も多くが改訂されたため、新たな改訂を盛り込んだ画像診断による癌の病期診断を改めて企画した。

本書の特徴としては、わが国の『癌取り扱い規約』最新版に準ずることを原則とし、国際的な取り決めであるUICCなどとの相違点があれば、その点についても言及している。原発腫瘍(T)と領域リンパ節(N)を決めるために、よく使われるモダリティの撮影方法を記載し、その上で、これらの画像モダリティでの原発腫瘍の局所進展と領域リンパ節転移についての画像診断上のポイントについて例解している。特に原発腫瘍では、T1, T2, T3, T4の典型的な実例を、できるだけ数多く例解するように企画した。領域リンパ節については、誌面の都合上すべてのリンパ節を網羅することはできないため、各癌で転移頻度の高いリンパ節について、リンパ節転移例を提示して例解している。原発腫瘍の局所進展と転移頻度の高い領域リンパ節転移を、画像も用いて例解することに力点を置き、遠隔転移(M)については、記載しないか簡素なものに留めている。

各論の前には、TNM分類の総論(general rule)について、画像診断に必要な部分を抜粋して記載した。TNM分類の根幹となる総論を正しく知ること、臨床現場での診療各科との意思疎通を円滑にさせていただく狙いがある。

癌の病期診断が求められる臨床の現場で、本書を開き、提示されている症例をみて解説を読むことで、より正確な診断ができ、診療の質の向上に役立つことを願っている。

2022年1月

国立がん研究センター中央病院 副院長 / 放射線診断科 科長

楠本 昌彦